大学生アスリートが考えるフェアプレイ促進・阻害要因[†]

榎本 恭介* 清水 智弘* 荒井 弘和**

Facilitating and Disturbing Factors of Fair Play among Collegiate Athletes[†]

Kyosuke ENOMOTO*, Tomohiro SHIMIZU* and Hirokazu ARAI**

Abstract

This study aimed to clarify the factors that facilitate and disturb fair play among collegiate athletes, and to exploratorily examine the relationships among each of them. Text data on the factors facilitating and disturbing fair play for collegiate athletes were collected. Then, the data was organized, summarized and illustrated using the KJ method. Data from 137 participants (mean age = 18.49 ± 1.68 years) yielded 121 answers about fair play facilitating factors and 142 answers about fair play disturbing factors. Results show that seven large categories were obtained as the fair play facilitating factors, and six large categories were obtained as the fair play disturbing factors. As for facilitation factors, it was clarified that it was important to have compatible “fair play spirit” with “psychological factors to facilitate self-control”, and factors that are expected to be related to these two factors were identified. In addition, regarding disturbing factors of fair play, it was found that several disturbing factors have led to “psychological factors that disturb self-control.” In other words, it was suggested that unfair play was caused by the lack of self-control.

Key words : Fair Play Spirit, Sportpersonship, Gamesmanship, Self-control, UNIVAS

1. 緒 言

スポーツ庁¹⁾は、我が国のスポーツ・インテグリティの確保のためにというメッセージの中で、フェアプレイによってスポーツの価値を高める責務を強調している。またスポーツ庁は、スポーツ・インテグリティの確保に関する主な取り組みとして、選手やサポートスタッフ等を対象としたドーピング防止教育、フェアプレイ精神の教育の実施を紹介している。

このような現状の中、我が国の大学スポーツ

においては、大学ブランドの強化、学生アスリートの人格形成や学力向上、スポーツを通じた大学の資金調達力向上などの目的のもと、日本版NCAAである一般社団法人大学スポーツ協会（UNIVAS）が設立され²⁾、今後大きな環境の変化が予想される。場合によっては、大学スポーツはますます勝利至上主義に傾くことでフェアプレイが軽視され、かえって大学スポーツの価値が低下してしまうかもしれない。そのような事態を防ぐためにも、フェアプレイに関連する要因を明らかにする必要がある、我が国

[†] 原稿受付 2019年8月20日 原稿受諾 2019年11月26日

* 法政大学大学院人文科学研究科 〒162-0843 東京都新宿区市谷田町2-15-2

** 法政大学文学部 〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1

* School of Humanities, Graduate School of Hosei University, 2-15-2, Ichigayatamachi, Shinjuku-ku, Tokyo, Japan (162-0843)

** Faculty of Letters, Hosei University, 2-17-1, Fujimi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan (102-8160)

ではフェアプレイの類似概念のスポーツパーソンシップ（スポーツマンシップ）に対する態度についての研究が行われている。賀川ほか³⁾は高校生を対象に勝敗に対する態度およびスポーツパーソンシップに対する態度について、(1)経験年数、(2)競技水準、(3)活動時間、(4)スポーツ志向型の4つの要因から分析を行い、スポーツパーソンシップに対する態度においては要因による明確な違いが認められなかったことを報告している。岡沢ほか⁴⁾は女子大学生を対象に、賀川ほか³⁾と同様の4つの要因によるスポーツパーソンシップに対する態度や勝利に対する態度の違いを検討し、経験年数以外の要因においてはスポーツパーソンシップに対する態度の違いは認められず、経験年数においてはスポーツの経験年数が0年の参加者と7年以上の参加者が他の参加者よりスポーツパーソンシップに対する態度が高いことを示した。石井ほか⁵⁾は体育学部の学生は一般学生に比べ有意に低いスポーツパーソンシップに対する態度を持っていること、高スポーツパーソンシップ群の体育学生は“スポーツパーソンシップ的であるべき”という説得を受けた場合、スポーツパーソンシップに対する態度が低下したことを報告している。また石井ほか⁶⁾⁷⁾は、スポーツパーソンシップに対する態度と勝敗への態度の間に負の相関があること、スポーツパーソンシップに肯定的な説得を行う条件では両方の態度に有意な変化は認められなかったが、スポーツパーソンシップに否定的な説得を行う条件ではスポーツパーソンシップに対する態度は有意に否定的な方向に変化し、勝敗への態度は有意に向上したことを示した。

次に、スポーツにおけるフェアプレイとして、ルールの遵守が挙げられるだろう。そして、これを裏返した、競技中の不正行為に関連する要因、すなわちフェアプレイを阻害する要因の研究が行われている。思春期の競争的なテニス選手に対し調査を行ったLucidi et al.⁸⁾は、競技中の不正行為を受容する態度が、実際の競技における不正行為を予測したことを示している。

10歳から14歳のサッカー選手に対し調査を行ったBoixadós et al.⁹⁾では、競技に対する技術の習熟を重視する動機づけとラフプレイや不正行為を受容する態度との間に、負の相関関係が示されている。

また、「チームメイトや相手選手が怪我などをした際に手を差し伸べる」といった具体的なフェアプレイ行動に関連した要因も研究されている。Kavussanu and Boardley¹⁰⁾は、競技中の向社会的行動、および反社会的行動を測定する尺度を作成し、味方選手への向社会的行動、相手選手への向社会的行動、味方選手への反社会的行動、相手選手への反社会的行動のそれぞれ2因子があることを明らかにしている。Bolter and Kipp¹¹⁾はコーチの行動と競技中の向社会・反社会的行動の関係性を検討し、コーチが選手のスポーツパーソンシップにそぐわない行為を罰すること、およびスポーツパーソンシップの手本を示すことが、コーチとの関係性を媒介し相手選手への反社会的行動を減少させること、また、コーチがスポーツパーソンシップの手本を示すことが、チームメイトとの関係性を媒介し、相手選手および味方選手への向社会行動を増加させることを示している。

以上のように、海外においては、フェアプレイに関連する研究が多数行われている。しかし、我が国のフェアプレイやスポーツパーソンシップに関する心理学的研究は少なく、また年代としてはやや古いものが多い（例えば、賀川ほか³⁾、岡沢ほか⁴⁾、石井ほか⁵⁾⁷⁾）。そこで本研究では、我が国の大学生アスリートを対象に、フェアプレイを促進・阻害する要因を明らかにし、それぞれの要因の関係性を探索的に検討する。

2. 方 法

2.1 調査対象者と調査時期

本研究の対象者は、研究参加に同意した4年制私立大学の体育会運動部に所属する大学生アスリートであった。対象者はすべて、いわゆるスポーツ推薦入試で入学した学生である。調査は、2017年7月に行った。なお本研究は、日比ほか¹²⁾、

泉ほか¹³⁾と属性データの一部を共有している。

2.2 調査項目

2.2.1 属性

性別, 年齢, 学年について回答を求めた。

2.2.2 フェアプレイを促進する要因

「あなたのフェアプレイ行動を促進する要因(フェアプレイを行いやすくさせる要因)は何ですか?」という問いに対して, 自由記述で回答を求めた。なお, フェアプレイの定義としては, フェアプレイがゲーム・ルールを遵守するための強制力を持った規定的な規範要求の「形式的フェアプレイ」と, 相手や審判員に対する尊敬や騎士的精神のような制裁によって強制されることのない期待としての「非形式的フェアプレイ」からなるとするレンク・ビルツ¹⁴⁾の定義や, ルールを守る, 審判や対戦相手を尊重する, 全力を尽くす, 勝っても驕らず, 負けてもふてくされたりしない「行動としてのフェアプレイ」と, スポーツの場面に限らず日常生活の中でも自分の考えや行動の善悪を自分の意志で決められる「フェアプレイ精神」からなるとする日本体育協会(現, 日本スポーツ協会)¹⁵⁾の定義など, いくつかの定義が存在する。しかし, どのようなプレイがフェアプレイであるかということは, 定義や事例を挙げて明確に規定することは難しい¹⁶⁾。また, フェアプレイは選手個人に内面化された倫理的な行為規範の発現であり¹⁷⁾, 選手が従来の定義に当てはまらない行動をフェアプレイと認識している可能性もある。本研究ではそのような行動に関する要因についても収集をするべきであると考えたため, フェアプレイの定義は行わず, 選手自身の考えに基づいて回答させた。

2.2.3 フェアプレイを阻害する要因

「あなたのフェアプレイ行動を阻害する要因(フェアプレイを行いにくくする要因)は何ですか?」という問いに対して, 自由記述で回答を求めた。

2.3 手続き

大学の講義開始前の時間を利用して質問紙の

配布・回収を行った。その際, 参加同意書を事前に配布し, 研究参加の同意を得た上で, 質問紙の配布・回収を行った。なお, 参加同意書には, 本研究の目的や所要時間, 回収した質問紙やデータの取り扱い方法, 本研究から得られる結果のフィードバック方法, 研究者の情報と連絡先について明記した。そして, 参加者が回答をいつでも中断できる権利を明記し, 倫理的な配慮を行った。

なお本調査は, 法政大学文学部心理学科・心理学専攻倫理委員会において審査を受け, 研究実施の承認を得た上で実施された。

2.4 分析方法

分析作業は, スポーツ心理学を専門とする大学教員1名, スポーツ心理学を専攻する修士課程の大学院生2名の合計3名で行った。KJ法¹⁸⁾の4つのステップのうち, 1つ目の「紙切れづくり」, 2つ目の「グループ編成」および3つ目の「A型図解化」に基づいてグループ化を行った。報告された自由記述を改変することなく1つずつカードにした上で, 作業者間で議論を行い, 研究目的に鑑みて, 同意にいたるまで吟味・検討し, それらのカードをグループ化した。集約が困難な回答があった場合は, 無理に他の回答群に集約せず, そのまま独立して扱った。最終的に, カテゴリは3段階(大カテゴリ・中カテゴリ・小カテゴリ)に分けられた。なお, 大カテゴリは【】, 中カテゴリは『』, 小カテゴリは「」として表示している。

最後に, 関係があると見なされた大カテゴリ同士を近接させ(「空間配置」), それらを実線(―)で結び, 「A型図解」(第3ステップ)を行った。

3. 結果と考察

3.1 対象者の人口統計的データ

152名を対象に質問紙を配布し, 149名から同意書への同意を得た(98.03%)。この149名の内, 回答に不備のない137名(男性115名, 女性21名, 無記入者1名, 平均年齢18.49±1.68歳)を分析対象とした(有効回答率91.95%)。

3.2 フェアプレイ促進要因

フェアプレイ促進要因について、121の回答が得られた。集約された結果をTable 1に示す。

結果として、【フェアプレイ精神】【フェアプレイへの良い態度】【周囲のフェアプレイとフェアプレイへの期待】【競技に対するポジティブな姿勢・取り組み・環境】【セルフコントロールを促進する心理的要因】【競技のルール・納得のいく判定】【特になし】という大カテゴリが得られた。

続いて、グループ編成の結果に基づき、A型図解を行ったところ、Fig. 1に示す結果が得られた。なお、【特になし】カテゴリは省略した。

フェアプレイ促進要因としては、カテゴリ化および図解化の結果から、【フェアプレイ精神】と【セルフコントロールを促進する心理的要因】を両立することが重要であると示された。フェアプレイ精神が高くとも、競技中にセルフコントロールを失ってしまえば、フェアプレイを行うことは難しく、セルフコントロールを保ていてもフェアプレイ精神がなければフェアプレイを行うことは難しい。スポーツメンタルトレーニングなどによってセルフコントロール能力を高めること、そしてフェアプレイ精神を育む教育的なアプローチを行うこと、この2つを共に行うことによって選手のフェアプレイを促すことができると考えられる。

【フェアプレイ精神】との関連が予想される要因として、『フェアプレイの魅力』、『フェアプレイへの意識の高さ』、『フェアプレイ・スポーツパーソンシップの知識』からなる【フェアプレイへの良い態度】という大カテゴリが形成された。『フェアプレイの魅力』については、「フェアプレイをして勝った時の嬉しさ」や「楽しくプレイできること」といった小カテゴリから形成されており、実際の競技の中でフェアプレイを実践することにより得られる魅力であることが伺える。『フェアプレイへの意識の高さ』についてはフェアプレイを常日頃心がける重要性が、『フェアプレイ・スポーツパーソンシップの知識』についてはフェアプレイやスポーツパーソン

シップについて学ぶ機会を設ける重要性が示唆された。賀川ほか³⁾においてはスポーツの経験年数の違いによってスポーツパーソンシップへの態度に違いは認められなかったが、岡沢ほか⁴⁾ではスポーツの経験年数が0年の参加者と7年以上の参加者が他の参加者よりスポーツパーソンシップへの態度が好ましかった。この違いは、スポーツの経験年数を重ねる中で、この大カテゴリに示されているようなフェアプレイについての良い態度を形成するような経験をしているか否かによって生じていることが考えられる。

次に【フェアプレイ精神】との関係が予想される要因として、『他者が行うフェアプレイ』『周りのフェアプレイへの期待』からなる【周囲のフェアプレイとフェアプレイへの期待】という競技環境のフェアプレイに関する大カテゴリが形成された。『他者が行うフェアプレイ』は、「みんなのフェアプレイ」「相手のフェアプレイ」「憧れの選手のフェアプレイ」の3つの小カテゴリから構成されており、競技環境に存在する他の選手のフェアプレイが増加することによりフェアプレイが促進される可能性や、プロの選手が行うフェアプレイの価値が示された。

「周りの目」「周りの期待」からなる『周りのフェアプレイへの期待』カテゴリは、言い換えると、フェアプレイをすべきという期待の認知の『規範的意識』カテゴリとも言えるだろう。このような意識を高めるために、指導者や競技を観戦する者が選手にフェアプレイを期待することの機能が示された。またこの大カテゴリは【フェアプレイ精神】や【フェアプレイへの良い態度】につながるだけでなく、選手の冷静さを促し【セルフコントロールを促進する心理的要因】にもつながる重要な要因であると考えられる。

『競技に対するポジティブな姿勢』『競技に対するポジティブな取り組み』『良いチーム環境』からなる【競技に対するポジティブな姿勢・取り組み・環境】という大カテゴリが形成された。これはポジティブな身体的・心理的状态で競技に臨めることが【セルフコントロールを促進する心理的要因】につながり、間接的にフェ

Table 1 大学生アスリートのフェアプレイを促進する要因

【大カテゴリ (回答数)】	『中カテゴリ (回答数)』	「小カテゴリ (回答数)」	主な回答 (重複していた回答の数)
フェアプレイ精神 (41)	フェアプレイ精神 (41)	相手へのリスペクト (13)	相手を尊重する 相手のことをリスペクトする 相手の気持ちを考える。相手も自分を気づかってくれる
		相手への気遣い (11)	相手を気遣う (2) あいさつをしっかり 試合後に握手する
		礼儀作法に関する心がけ (11)	相手がいって競技ができるという感謝の気持ちを持つこと 指導してくれた人への感謝の気持ち 試合中レフリーの判断にゆだねる
		周りへの感謝 (4)	倫理的、道徳的思考
		審判員へのリスペクト (1)	
		道徳性 (1)	
フェアプレイへの良い態度 (26)	フェアプレイへの意識の高さ (13)	フェアプレイの心がけ (9)	真剣勝負を互いに心がける スポーツマンシップの精神を心にちかう！必ずフェアプレイをするとう気持ちで練習試合にのぞむ
		前提条件としてのフェアプレイ (4)	人としての当たり前のこと 常識だから
	フェアプレイの魅力 (11)	フェアプレイをして勝った時の嬉しさ (5)	フェアプレイで勝ってこそ一流という考え 自分の力で相手を倒すから気持ちが良い
		楽しくプレイできること (2)	楽しくプレーする 楽しくやりたい
		気持ちよく競技を終えることができること (2)	相手も自分も気分良く終われること (2)
		気持ちよくプレイできること (1)	気持ちよくプレイがしたいから
		友達ができること (1)	友達を多くするから
	フェアプレイ・スポーツマンシップの知識 (2)	フェアプレイやスポーツマンシップについて学んでいること (2)	フェアプレイ精神を学んだとき スポーツマンシップの大切さを知っているから
周囲のフェアプレイとフェアプレイへの期待 (21)	周りのフェアプレイへの期待 (11)	周りの目 (9)	チームとしての評価を考える まわりの目になるから本当はどんな手をつかってでも勝ちたい
		周りの期待 (2)	周りの期待 周りの気持ち
	他者が行うフェアプレイ (10)	みんなのフェアプレイ (5)	みんながフェアプレイをする 試合中敵でも良いプレーをほめたり、ほめてもらったりすること
		相手のフェアプレイ (4)	相手がフェアプレイ 相手が礼儀正しいとき
		憧れの選手のフェアプレイ (1)	あこがれの選手がフェアプレイだから
競技に対するポジティブな姿勢・取り組み・環境 (21)	競技に対するポジティブな姿勢 (10)	スポーツに対する思い (6)	スポーツが好きであるかどうか 国技をやっているプライド
		謙虚さ (1)	謙虚なプレー
		一生懸命さ (1)	一生懸命にする
		しっかりとした自覚 (1)	しっかりと自覚をもつ
		自分から逃げたくない気持ち (1)	自分から逃げたくない気持ち
	良いチーム環境 (5)	チームの良い雰囲気 (2)	選手同士がなごやかな雰囲気にする チームのみんなと楽しいと思ながら練習すること。一緒に向上意識をもっているとき
		チーム力 (2)	チーム力 団結力
		スタッフからのサポート (1)	スタッフの選手に対してサポート
	競技に対するポジティブな取り組み (5)	普段からの取り組み (2)	普段からしっかりする きびきびと行動をすること
		自信の持てる練習 (1)	自信のもてる納得のいく練習
		高いモチベーション (1)	モチベーションを上げる
		コンディションの良さ (1)	調子がいいとき
セルフコントロールを促進する心理的要因 (18)	セルフコントロールを促進する心理的要因 (18)	心の余裕 (7)	相手のことを考えられる心の余裕 勝っているとき余裕があるとき
		冷静さ (3)	冷静でいられるか プレー中は熱く、それ以外は冷静に
		平常心 (3)	平常心 いつも通りを心がける
		集中している状態 (2)	集中している時 集中
		自分を客観視すること (2)	自分を客観視するようにしている 試合映像を見る
		真面目な性格 (1)	まじめな性格
競技のルール・納得のいく判定 (9)	競技のルール (8)	ルールによる制約 (4)	ルールに従う ルール守らないと試合に参加できないから
		リスクの低減 (3)	リスクを減らすため フェアプレイをしないと相手から抗議をかけられたりして、その審問で負けると自分の点が悪くなるから あとジュリーボートに見られて、違反をするとペナルティの履行をしなければならないから
		アンフェアプレイに対する罰 (1)	罰をあたえる
	納得のいく判定 (1)	納得のいく判定 (1)	公平な審議
特になし (7)	特になし (7)	特になし (7)	特にない (2)

Fig. 1 大学生アスリートのフェアプレイを促進する要因 (A型図解化の結果)

アプレイを促進すると考えられる。

『競技のルール』『納得のいく判定』からなる【競技のルール・納得のいく判定】という大カテゴリが形成された。ルールを守ることによる警告や退場などのリスクの減少や、アンフェアなプレイに対するルールによる拘束、審判員の納得のいく判定がフェアプレイを促進することが示唆された。現実的に、判定技術の向上や、アンフェアプレイをルールにより強く拘束することが、フェアプレイの促進につながるのかもしれない。しかし、ルールによる拘束が促進するフェアプレイは、ルールを守るという形式的な行為のみであり、ルールを超えて相手選手や審判員を尊重するといった非形式的フェアプレイ¹⁴⁾につながるものではないと考えられる。ルールを厳格化する際、何を求めて厳格にするのか、議論が必要となるであろう。

3.3 フェアプレイ阻害要因

フェアプレイ阻害要因について、142の回答が得られた。集約された結果をTable 2に示す。

結果として、【セルフコントロールを阻害する心理的要因】【他者のアンフェアプレイ】【競技に対するネガティブな姿勢・取り組み・環境、それらに起因するパフォーマンスの悪さ】【自分のアンフェアプレイ】【ネガティブな競技的要因】【特になし】という大カテゴリが得られた。

続いて、グループ編成の結果に基づき、A型図解を行ったところ、Fig. 2に示す結果が得られた。なお、【特になし】カテゴリは省略した。

KJ法の結果、フェアプレイを阻害する要因として、アンフェアプレイそのものである【自分のアンフェアプレイ】という大カテゴリが得られた。これはアンフェアな行動そのものがフェアプレイに反しているものであることから、得られた結果であると考えられる。そして、この【自分のアンフェアプレイ】につながる直接的な要因として、「勝利への執着心」「いら立ち」「気のゆるみ」などから構成される【セルフコントロールを阻害する心理的要因】カテゴリが得られた。勝利にこだわる態度は、不正行

為やゲームズマンシップとの関連¹⁹⁾やスポーツパーソンシップへの態度との負の相関が示されており⁶⁾、セルフコントロール能力の欠如は競技中の攻撃行動との関連が示されている²⁰⁾。また、フェアプレイを促進する要因において【セルフコントロールを促進する心理的要因】というカテゴリが得られていることから、セルフコントロール能力がフェアプレイを行う上で重要であると考えられる。

また、他の阻害要因は【セルフコントロールを阻害する心理的要因】を経由してフェアプレイを阻害していると考えられる。『相手のアンフェアな態度・行動』と『周りのアンフェアな言葉・雰囲気』からなる【他者のアンフェアプレイ】はその最たる例である。相手選手のラフプレイや暴言は、選手の集中力を乱し、イライラさせ、相手がアンフェアなのだから同じことをやり返してやろう、といった「邪念」につながることは想像に難くない。『周りのアンフェアな言葉・雰囲気』についても同様である。石井ほか⁷⁾においてスポーツパーソンシップを否定する意見はスポーツパーソンシップに対する態度を低下させ、勝敗への態度を高めることが示されていることから、選手だけでなく、指導者、観客、審判員まで、選手にかける言葉には注意が必要であり、選手のためにも、競技のためにも、競技に参画する全てのアントラージュにフェアプレイが求められる。

『納得のいかない判定』『ルールの抜け道』『アンフェアプレイを誘発するシチュエーション』から構成される【ネガティブな競技的要因】という大カテゴリが構成された。『納得のいかない判定』は、「いら立ち」や「極度の興奮」を引き起こし、審判員への暴言・暴力行為などのアンフェアプレイにつながる事が予想される。しかし、審判員も人間であり、1つのミスもないレフェリングを毎試合のように行うことは難しいかもしれない。審判員の能力向上やビデオ判定などの技術の導入とともに、選手側においても、納得のいかないレフェリングがあったとしても、審判員の判定を尊重し、判定を引

Table2 大学生アスリートのフェアプレイを阻害する要因

【大カテゴリ(回答数)】	『中カテゴリ(回答数)』	「小カテゴリ (回答数)」	主な回答 (重複していた回答の数)
セルフコントロールを阻害する心理的要因 (37)	セルフコントロールを阻害する心理的要因 (37)	勝利への執着心 (17)	勝ちたいという強い気持ち なんとしても勝たなくてはいけない時 イラつき 相手に対してイライラしたりすること
		いら立ち (13)	極度の興奮 (3) 邪念 (2)
		過剰な闘争心 (1)	じゃまな考え 相手をぶっ飛ばしたい心
		気のゆるみ (1)	気のゆるみ
他者のアンフェアなレイ (37)	相手のアンフェアな態度・行動 (29)	相手の良くない態度 (11)	相手の態度が悪いとき 相手がなめくさってるとき
		相手のフェアではないプレイ (7)	相手が自分に対していやなことを行ってきた時 相手がフェアプレイではないことをすると、自分も頭にきてしまう
		相手のラフプレイ (6)	競技中に暴力行為を受けたとき 相手が故意的にファールを続けてやってきたときなど
		相手の反則 (3)	相手のルールを無視したプレイ 相手に反則などをされること
		相手の挑発 (2)	相手の挑発 (2)
競技に対するネガティブな姿勢・取り組み・環境、それらに起因するパフォーマンスの悪さ (19)	コンディション・パフォーマンスの悪さ (10)	周りのアンフェアな言葉・雰囲気 (8)	野次の飛ばし合いのとき 場外からの応援者からのヤジなどによる妨害 周りの雰囲気 周りからの目
		周りのヤジ・言葉 (6)	
		周りの雰囲気 (2)	
		コンディションの悪さ (5)	ケガや病気 具合が悪いとズル (楽になるように) してしまう
		良くないパフォーマンス (5)	失敗したらすぐに感情に出る 精神面メンタルの不安 (負けている時やうまくいかない時)
自分のアンフェアなレイ (18)	競技に対するネガティブな姿勢 (6)	気が乗らないこと (3)	先輩に怒られて気が乗らないとき 気分がすぐれない気分がのらない時のモチベーション
		身勝手な考え (2)	自分勝手 相手の事を考えていない
		感謝の気持ちがないこと (1)	感謝の気持ちがないこと
		練習で自信を培えていないこと (1)	自信のもてない練習
		不適切な礼儀作法 (1)	礼儀作法をだらしなくすること
自分のアンフェアなレイ (18)	チーム内の不和 (1)	仲間割れ (1)	仲間割れ (1)
		自分のアンフェアな行動 (7)	相手を変に敵視したりする 相手を睨みつける
		ドーピング (7)	勝ちたいという欲に負けて薬に手を出す (2) 勝ちたいと思いついて、薬に手を出す
		自分の文句や暴言 (4)	文句や暴言を言う 相手選手への暴言
ネガティブな競技的要因 (9)	アンフェアプレイを誘発するシチュエーション (4)	自分にとって良いように誤審された時 (1)	私の良いように誤審されたとき
		競った場面 (1)	せった場面でのポイント
		相手が弱い時 (1)	相手がよわいとき、はやく試合をおわらせたい
		相手の方から先にフェアプレイをされた時 (1)	相手の方からフェアプレイをやられた時
特になし (16)	特になし (16)	ルールの抜け道 (3)	フライングをする 違反とされている行動をすると船が早くなるギリギリを攻めて相手を不利な位置、自分を有利な位置にしようとする気持ち ルールがあやふや
		不明瞭なルール (1)	
		納得のいかない判定 (2)	不公平な審議 審判が下手な時
特になし (16)	特になし (16)	特になし (16)	特になし (4) 行わない理由が無い

Fig.2 大学生アスリートのフェアプレーを阻害する要因 (A型図解化の結果)

きずらず競技に取り組むことができるような心理的な準備が必要である。

『ルールへの抜け道』と『アンフェアプレイを誘発するシチュエーション』においては、【セルフコントロールを阻害する心理的要因】を経由しアンフェアプレイにつながっていることが考えられる。特に『ルールへの抜け道』においては、Ponseti et al.¹⁹⁾のように「勝利への執着心」がルールには違反しない範囲でのアンフェアな振る舞い、すなわちゲームズマンシップのような形でフェアプレイを阻害していることが考えられる。

『コンディション・パフォーマンスの悪さ』『競技に対するネガティブな取り組み』『競技に対するネガティブな姿勢』『チーム内の不和』から構成される【競技に対するネガティブな姿勢・取り組み・環境それらに起因するパフォーマンスの悪さ】といった、パフォーマンスやコンディション、競技の取り組み方などに関連する大カテゴリも形成された。これらも直接フェアプレイを阻害するのではなく、「いら立ち」や「気のゆるみ」といった【セルフコントロールを阻害する心理的要因】につながることで、間接的にフェアプレイを阻害していると考えられる。

3.4 フェアプレイ促進要因と阻害要因との関連

両要素の分析結果を並べると、【セルフコントロールを促進する心理的要因】と【セルフコントロールを阻害する心理的要因】や、【周囲のフェアプレイとフェアプレイへの期待】と【他者のアンフェアプレイ】など、相反の関係にある要因が多く見て取れた。つまり、阻害要因を減少させることが、促進要因を増加させることに繋がると予想される。それぞれの競技環境において増加させやすい促進要因（減少させやすい阻害要因）はどの要因であるのか、また今回明らかになった要因の中でもどの要因の操作がフェアプレイの促進に効果的であるのか、今後検討する必要がある。

3.5 本研究の限界点と今後の展望

本研究の限界点のひとつとして、図解化され

た関係性が実際の競技場面にどの程度当てはまるのかという、妥当性の課題が挙げられる。本研究では自由記述データに対してKJ法を用いて、フェアプレイの促進・阻害の過程を探索的に図解化した。今後は、本研究によって得られた要因についての尺度などを用いて、過程の妥当性の検証や、これまでの先行研究において確認された要因以外のフェアプレイに対して有意な影響を及ぼす要因を検討する必要がある。また、分析の結果、フェアプレイ阻害要因として【セルフコントロールを阻害する心理的要因】や【他者のアンフェアプレイ】、【競技に対するネガティブな姿勢・取り組み・環境、それらに起因するパフォーマンスの悪さ】などが示されたが、これらは競技において完全に除外することが難しい要因である。そのため、フェアプレイ阻害要因がある状況においても、フェアプレイを促進することのできる要因について、優先的に検討を行う必要があるだろう。

4. 結 論

本研究では、大学生アスリートのフェアプレイを促進・阻害する要因を明らかにし、その要因の関係性を検討するため、フェアプレイ促進・阻害要因について自由記述形式でテキストデータを収集し、KJ法によって整理・集約・図解化を行った。その結果、フェアプレイ促進要因については、7個の大カテゴリが得られ、【フェアプレイ精神】と【セルフコントロールを促進する心理的要因】を両立させる重要性と、この2つの要因に関連が予想される要因が明らかになった。また、フェアプレイ阻害要因については、6個の大カテゴリが得られ、それぞれの要因は【セルフコントロールを阻害する心理的要因】へつながり、セルフコントロールが困難になることにより、アンフェアプレイにつながっていることが示唆された。

謝 辞

本研究を行うにあたり、大学生アスリートの方々に多大なご協力をいただきました。また本

研究は、平成30-令和元年度科学研究費補助金基盤研究(C)「大学生アスリートの価値の明確化を促す心理サポートプログラムの開発」、平成26-28年度科学研究費補助金 基盤研究(C)「大学生競技者の生活支援マニュアルの開発：スポーツ・ライフ・バランスの実現に向けて」から援助を受けました。関係各位に感謝申し上げます。

参 考 文 献

- 1) スポーツ庁；我が国のスポーツ・インテグリティの確保のために, 2018a. http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/choukan/detail/1406121.htm (参照日2019年8月12日).
- 2) スポーツ庁；一般社団法人 大学スポーツ協会 (UNIVAS) 設立概要, 2018b. http://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/a_menu/sports/micro_detail/___icsFiles/afieldfile/2018/12/25/1410363_005.pdf (参照日2019年8月12日).
- 3) 賀川昌明, 他；スポーツ参加による態度変容の研究：勝敗に対する態度, スポーツマンシップに対する態度について, 徳島大学教養部紀要保健体育, Vol.12, pp.9-24, 1979.
- 4) 岡沢祥訓, 他；スポーツマンシップに対する態度の研究-大学女子における態度形成要因について-, 体育の科学, Vol.31, No.5, pp.362-365, 1981.
- 5) 石井源信, 他；スポーツマンシップに対する態度の研究：イメージの変遷と説得コミュニケーションによる効果, 日本体育学会大会号, Vol.28, p.191, 1977.
- 6) 石井源信, 他；スポーツマンシップに対する態度の研究<その3>：説得的コミュニケーションによる態度変化, 日本体育学会大会号, Vol.29, p.174, 1978.
- 7) 石井源信, 他；スポーツに対する態度の説得的コミュニケーションによる影響-スポーツマンシップおよび勝敗に対する態度について-, 東京工業大学人文論叢, Vol.8, pp.95-106, 1982.
- 8) Lucidi, F., et al. ; Moral Attitudes Predict Cheating and Gamesmanship Behaviors among Competitive Tennis Players, *Frontiers in Psychology*, Vol.8, pp.1-11, 2017.
- 9) Boixadós, M., et al. ; Relationships among Motivational Climate, Satisfaction, Perceived Ability, and Fair Play Attitudes in Young Soccer Players, *Journal of Applied Sport Psychology*, Vol.16, No.4, pp.301-317, 2014.
- 10) Kavussanu, M and Boardley, I. D. ; The Prosocial and Antisocial Behavior in Sport Scale, *Journal of Sport and Exercise Psychology*, Vol.31, No.1, pp.97-117, 2009.
- 11) Bolter, N. D., and Kipp, L. E. ; Sportspersonship Coaching Behaviours, Relatedness Need Satisfaction, and Early Adolescent Athletes' Prosocial and Antisocial Behavior, *International Journal of Sport and Exercise Psychology*, Vol.16, No.1, pp.20-35, 2018.
- 12) 日比千里, 他；大学生アスリートの競技中の暑熱に対する思考と対処行動, 法政大学スポーツ研究センター紀要, Vol.35, pp.31-33, 2019.
- 13) 泉重樹, 他；大学生アスリートを対象とした脳震盪経験の実態調査, 法政大学スポーツ健康学研究, Vol.10, pp.1-7, 2019.
- 14) レンク・ピルツ；片岡暁夫監訳, 関根正美他訳；フェアネスの表と裏, 不昧堂出版, 2000.
- 15) 日本スポーツ協会；フェアプレイで日本を元気に：フェアプレイって？, 2012. <https://www.japan-sports.or.jp/portals/0/data0/fair/#cont1> (参照日2019年8月12日).
- 16) 深澤浩洋；フェアプレイとは何か, 友添秀則編；よくわかるスポーツ倫理学, ミネルヴァ書房, pp.20-21, 2017.
- 17) 梅垣明美, 他；前近代におけるフェアプレイの検討：N. エリアスのフィギュレーションの視点を手がかりとして, 体育学研究, Vol.59, No.2, pp.513-527, 2014.
- 18) 川喜田二郎；続・発想法, 中央公論新社, 1970.
- 19) Ponseti, F. J., et al. ; Fair Play, Cheating and Gamesmanship in Young Basketball Teams, *Journal of Physical Education and Health*, Vol.5, No.8, pp.29-33, 2018.
- 20) Sofia, R. M., and Cruz, J. F. A. ; Self-control as a Mechanism for Controlling Aggression: A Study in the Context of Sport Competition, *Personality and Individual Differences*, Vol.87, pp.302-306, 2015.